

# 大学生における他者意識と変化動機の関連についての研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1313062 百瀬拓未

## 1. 研究動機・研究目的

人はこの世に生を受けた時から「つながり」を持つ。それは一人だけでは生まれ得ず、相手が必要である。人々が求めるつながりは十人十色だが、そのようなつながりを持つことで、人々はより充実した生活を送り得る。つまり、人々が生活に満足するか否かは、望むようなつながりを持てるかそうでないかによっても影響される可能性がある。(国民生活白書, 2007 内閣府)

そうしたつながりが希薄化したと言われる現代社会であるが、地域と職場における望ましい付き合い方について、NHK 放送文化研究所が行った調査 (2003) によると、部分的や形式的な付き合いを望む人の割合は増加する傾向にあるとしている。

こうした変化がある中で、実際につなりの希薄化によって人間関係が難しくなっていると感じている人も相当程度存在し、(内閣府, 2004) その理由については、「モラルの低下」が最も高いものの、つながりの希薄化に関する項目が多く挙げられた。このことから、人々はある程度の距離を置いたつながりを好むようになったとはいえ、現実のつながりがそれ以上に希薄化が進み、むしろ必要とするつながりが持てないことへの不都合を感じている様子が伺える。

つながりには相手が必要と述べたが、これは他者を意識することも暗示している。

辻 (1993) によると、一般に自己に注意を向けやすい人は、他者にもそれを向けやすく、自己意識と他者意識は不可分な関係にあるとしている。このことから、他者や自己を意識するようにつながりが、希薄化を改善することにも寄与する可能性があると考えられる。

そこで本研究では、大学生における他者意識と変化動機について、他者意識尺度と変化動機尺度を用いてその関連を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

2016年10月1日から10月13日にかけて、日本の大学1年生から大学6年生(年齢問わず)の4年制または6年制大学に在学している大学生375名を調査対象とした。大学の種類に関しては、総合大学から単科大学など、無作為に選んだ。対象とした大学生375名のうち、有効回答数は、371名分(有効回答率98.9%)であった。

本研究では、質問紙調査法として、他者意識尺度と変化動機尺度の項目を使用した。他者意識尺度は、「内的他者意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」の3因子15項目から構成される。回答方法は5件法である。そして変化動機尺度は、「関係維持」「自然・無意識」「演技隠蔽」「関係の質」の4因子26項目で構成される。回答方法は5件法である。

### 3. 主な結果と考察

他者意識と変化動機（全体尺度の合計点）における相関分析を行ったところ、「他者意識」と「変化動機」の間には0.1%水準で有意な正の相関が認められた。

この結果は、先行研究（佐久間・無藤 2003, 中里ら 1982, 辻 1993, ）の文献考証から導いた理論仮説を支持するものである。この結果により、他者への注意を向けやすい人は、他者と一緒にいる時の自己を変えやすいことが明らかになった。

また、他者意識尺度の下位尺度である「内的他者意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」と、変化動機尺度の下位尺度である「関係維持」「自然・無意識」「演技隠蔽」「関係の質」において、それぞれの関係を見るために相関分析を行った。結果は、12項目中11項目において相関が認められた。しかし、「内的他者意識」と「自然・無意識」の間のみ、相関が認められなかった。

他者意識の下位尺度「内的他者意識」と変化動機の下位尺度「自然・無意識」の間に相関が見られなかったことは、「自然・無意識」の因子は能動的な行動ではない（佐久間・無藤, 2003）ために、他者をあまり意識していない傾向にあるからだと考えられる。つまり、変化動機の「関係維持」、「演技隠蔽」、「関係の質」は比較的能動的な行動という解釈になる。そのために、「内的他者意識」と「自然・無意識」の間に相関が認められなかったと言える。

### 4. 結論

- ①他者意識と変化動機の間では、正の相関が認められた。つまり、内的や外的や空想的に  
おいて他者を意識する傾向が強い人は、人と一緒にいるときに態度を変える傾向が強い。
- ②他者意識の下位尺度と変化動機の下位尺度の相関関係では、「内的他者意識」と「自然・  
無意識」以外の因子において、正の相関が認められた。これは理論仮説がおおむね支持  
されたことを示唆している。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたり、多くの皆様のご指導ならびにご支援を賜りましたことを心より感謝申し上げます。特に、指導教官である水野基樹先生には本研究に関して大学3年次の卒論論文中間発表の時より、本日に至るまで大変親切かつ細かなるご指導ご指摘を賜りました。2年間のゼミナール活動を通して先生から、人に対する心遣いや誠意、組織の重要性など多くのことを教えて頂きました。深甚なる感謝の意を表します。